

タイ山地におけるカレンの生業変容に関する人類学的研究

－換金作物、労働、社会関係－

平成 19 年度編入

派遣先国：タイ

派遣先機関：Department of Sociology-Anthropology,
Faculty of Social Science, Chiang Mai University

田崎 郁子

キーワード：カレン、換金作物生産、社会変容

派遣先機関の概要

派遣先機関であるチェンマイ大学社会科学部は 1964 年に創設され、社会学人類学部門 (Department of Sociology-Anthropology) の他にも Regional Center for Social Science and Sustainable Development (RCSD) や Women's Studies Center (WSC) など、タイ北部において「山地民」と呼ばれる人々について研究を続けてきた研究者や学生を擁する。その中でも社会学人類学部門では、社会関係やエスニシティ、文化、開発などを中心に扱っている。インターンシップでは、大学のゼミなどに参加し交流する中で、フィールド調査への指針を得たいと考え、派遣先として希望した。

派遣先でインターンシップを希望した動機と、派遣前に設定した目標について

本研究の目的は、第一に、換金作物を通して、タイ社会/国家がカレンをはじめとした山地に居住する人々をどのように見てきたのか、規定してきたのかを文献資料などをもとに歴史的に明らかにすることである。また第二に、長期のフィールド調査によって、カレンの人々の換金作物に対するミクロなレベルでの応答や社会・文化変容を明らかにすることである。それによって、換金作物対自給作物（近代対伝統）といった二項対立的な見方が創られてきた過程を示す。そして、現在のタイ社会の山地に対する差異化の構造の一端を明らかにするとともに、マクロなレベルでは差異を生み出す装置ともなる換金作物がミクロなレベルでは意味が多様に読み替えられていく様子を明らかにする。インターンシップでは、タイ北部での長期のフィールド調査を開始する準備を行いたいと考えた。特に、自身の研究関心と現在のタイの研究動向、社会状況を照らし合わせることで、現地に精通した研究者にアドバイスを求めること、そしてタイ北部を広域で調査することを目的とした。



王室プロジェクトによるカボチャの出荷



山地斜面でのキャベツ栽培

派遣期間中の活動について

①チェンマイ大学での研究環境の整備

受け入れてくださった先生の紹介で、研究者をはじめとして、学生、現地の調査助手の方など多くの人と知り合うことができた。今後は、タイ語での文献収集・読破を基本としながら、現地の学生と同じようにゼミに参加し交流を深めるとともに、将来的に研究成果を現地で発表し、共有していくための基盤を形成していく。

②メーホンソン県メラノイ郡での広域調査

タイ北部の中心都市チェンマイを含むチェンマイ県では、2007年頃から乾季3-4月に行われる焼畑の火入れによって生じる大気汚染のため、焼畑への圧力はますます強まっている。同時に山地民の行う換金作物生産への批判も強い。これに対して今回調査をしたメーホンソン県側では、焼畑での陸稲栽培やキャベツなどの換金作物生産に関しても、郡役所や森林局・王室プロジェクトなどの公務員でさえ「今のところは問題ない」と言う。また都市から距離があるため多国籍企業などが入りにくく、生協・政府関連プロジェクト・小商人などが換金作物の生産・販売に大きく関与していることが分かった。今後は、タイ北部広域（特にメーホンソン県他郡とチェンマイ県周辺）で同様の調査を行い、北タイの動向をつかむとともに、自身の関心と北タイ各地の換金作物生産を中心とした状況、タイ社会の動向を照らし合わせながら、長期フィールド調査への見通しを立てていく。

派遣先で印象に残った体験や経験

私は従来タイへ行くとカレンの村の中に籠もってしまいがちだが、今回のインターンではタイ人の知人と過ごす時間を多く持てた。中でも、新年祭であるソングラーンの期間お世話になった友人宅では、私の知っているカレンの村と比較してその物質的豊かさに目を見張った。コンクリートで建てられた家屋はとて大きく、毎食卓に並ぶおかずも豊富である。知人は常に甘い飲料を口にしながらテレビを見てくつろいでいる。一方で、私がかつて調査していたカレンの村では、このような家屋を建てることは夢として語られ、

日中は高校生位の子どもも含めて村中が田畑に出ており、テレビを見るなど考えられない。タイではこの数年、「足るを知る経済 (*setakit pho phiang*)」という言葉が流行り、山地に居住するカレンの人々のような質素な暮らしで満足することが賞賛されている。けれども、今回のようにタイ人である知人の村と、私の知っているカレンの村の暮らしを比較する機会を得てみると、「足るを知る経済」は都会に暮らす者の田舎讃美であるように思えてならない。

目標の達成度や反省点について

今回のインターンシップでは、最低限の目標である研究環境の整備は達成できた。今後、この環境を生かしてゼミに参加し、交流しながら研究を進めていきたい。一方、広域でのフィールド調査は始まったばかりである。現状把握に努めるとともに、今回の調査では達成できなかったが、研究のブレイクスルーとなるような面白いトピックを見つけることができると思う。そのため、換金作物生産を仲介する開発プロジェクトや多国籍企業、生協、インフラなどの状況の異なる様々な地域で情報収集に努めたい。